笑い飛ばして、笑い飛ばしてよ

木堂椎 Kodou Shii

「こんにちわー」と昼でもないのにあたしは微笑んで、狙いをつけていたイケメン新入生、マーシー君の隣に腰を降ろす。貸し切りにした居酒屋二階の座敷を、自由に歩き回るのは楽しい。どこもかしこもあたしら先輩が、新入生に絡んでいる。計、五〇名ほど。

「え、ちょっ」上着の胸ポケットに貼ってある油性マジックで津川雅史（まーしー）と書かれたシールの皺を直しながら、茶髪でツンツン頭のマーシー君が、びっくりする。あたしが中途半端にふたくちほど残っていたグラスに、ビールをなみなみ注いであげたからだ。

「あ、すんませんあの俺まだ実は、あんまりお酒、飲んだことなくて」

「いいのいいの。遠慮しないで、どんどん飲んじゃって」

「最初の一杯もなかなか飲めなくて、ちょっと残してたくらいなんすよ」

「いいのいいの。遠慮しないで、どんどん飲んじゃって」あたしは聞く耳持たずで、意地悪な態度を取ってあげる。先輩の、務めだ。

「え、じゃ、いただくっす……」なんてただたじたじになりながらも一生懸命ビールをこくこく含む初々しいマーシー君を見ていて、入学当時のあたしもここのただ飲みコンパで、代わる代わるやってくる先輩と話す度にビールに付き合わされ、酔ったどころか、泣いてしまったことを思い出す。あたしを泣かした二年生は三年生に囲まれて、こっぴどく叱られていた。入ってもらえなかったらお前のせいだからな！　もしあれだけの子を、逸材を逃がすなんてことになったら、お前クビ！

もう絶対に泣かしたりしないので、入って下さいませ。それで先輩方に死ぬほど懇願されて、あたしはこのサークルに入った。ちやほやされる未来が、想像できたから。現金と言われればそれまでだけど、うん、正直、器量の良い女の子って、そーゆーことだけを考えて日々を生きているんじゃないかなあ。絶対に誰にも言わないけど。

「やっぱだめだ、苦い……」新入生が少しのビールに四苦八苦している間に、あたしは一杯分、一気に、それも美味しそうに飲み干してみせた。

「凄いっす。お酒、強いんすねえ！」マーシー君が舌を巻く。巻きながらあたしの顔をチラと見て、その後に見えそうで見えない胸元や、紫のラインストーンを中心としたガラス製のつけ爪で盛られた指先や、黒のニーソックスに包まれた足指を舐めるように凝視したのを、あたしは見逃さない。大概の男子は器量の良い女の子に初めて出会った時、顔をまともに見ることができず、他のパーツに視線をズラし、そしてそのパーツに心酔するものだ。その反応に出くわす度、あたしはあたしの美貌に感動する。絶対に誰にも言わないけど。

「ううん、一年経てばだいたいみんな、飲めるようになるんだよ。あたしなんか、全然」そうあたしは謙遜して、向かいのテーブルを指差す。

「出身はどこなの？」「ああー愛媛。ど田舎！」「あははだいじょぶだいじょぶ！　あたしだって山形出身だからさ？」「新宿でハチ公探してたりとか、平気でやってたからね？」

天真爛漫な雰囲気の女性が、数人の新入生男女を相手にしながら豪快に酒を煽って、ガンガン笑いを取っていた。

「三年のキョーコさん。小柄だけど、多分この中で、男の先輩含めても一番お酒強いんじゃないかな。それに、可愛いし」まあ、あたしほどじゃないけどねといった付け足しは、もちろん付け足さない。

「キョーコさん春休みに彼氏と別れたばっかだからさ。うちのサークルに入ったら、付き合えちゃうかもしんないよ」はい、可愛いと思うっすなんていじらしい相槌が返ってきたので、唆してもみる。キョーコさんは新入生を食べる気満々なので、あたし彼氏いないってことアピールしといてよと、予めみんなに頼んでいた。

「おおー」マーシー君が、高揚する。「あ、えと、先輩の、お名前は」そして当然あたしのことも、気になってくれた。

「みずき。朝倉瑞希。普通に、みずきさんでいいよ」

「みずきさん。あ、みずきさんは、彼氏とかいるんですか」ほらね。

「いないんだよねー」いるよ！　いるに決まってんでしょまだ二年なのに野球部でスタメンの二の腕があたしの太腿くらいある逞しい彼氏と毎晩のよう

にやってるわよ突かれまくってるわよ。「最近なかなか良い人に、巡り会えなくてさー？」

本音を隠してあたしは、上目遣いで彼の事を見つめる。「あ、そうなんすか！　めっちゃ意外っす！」マーシー君は驚きながら、あたしの顔を見たりあたしの細長い足を見たりで、ウブな感じに目が泳いでいた。好ましい反応で、あたしはぞくぞくする。

たとえ恋人がいても、絶対に新入生にはいないと言うこと。サークル命令だった。それだけで入部してくる人数が、三割は違うのだそうだ。男の子も女の子もみんな騙されて、憧れの先輩と付き合えない現実を知り、同年代との恋に落ち着いていく。

「まあだから、キョーコさんもあたしも、男の子に凄い入ってほしいなあって思ってるんだよね」色気たっぷりに迫ってやると、「はい！　入ります。多分」マーシー君は即答し、「多分……？」とあたしが悲しそうな顔をしたら、「い、いえいえ！　絶対！」と、めろめろになりながら入部を約束してくれた。

このあたしが、数ヶ月前まで高校生だったような、まあ顔は新入生断トツで整っているけど、服装も髪型もそれなりにお洒落をしているつもりなんだろうけど、まだまだ幼いお子ちゃまと、交際をするわけがないでしょう。大学には豹柄とかどぎついピンクとかモヒカンとかドレッドとか、高校時にはありえなかった格好をしている男の子たちが、たくさんいる。まあそこまでしなくてもいいけど、とりあえず二の腕をあたしの太腿くらいにしてから出直してきなさいな。

「あ、でもこの紅茶研究会って、具体的に何をするサークルなんすかね？　俺、紅茶の知識とか、あんまないんすけど。午後の紅茶とか、リプトンとかしか飲まないし……」マーシー君が、質問してきた。ただで酒が飲める上に出会いがあるからと、なんだかよくわからないままただ飲みに参加する輩は多い。

「ふふ。何をすると思う？」実際あたしもそうだった。だって紅茶の研究をするために、わざわざ会を作る必要がある？　昔から紅茶は、好きだったけど。

「うーん、新しい味の紅茶を作ったり、有名な喫茶店を回ったりとかすかね」

「半分正解」あたしは軽く、マーシー君の肩に触れた。「あ」とかマーシー君が声を出すのでもうなんだか本当に新入生は可愛がりようがあるなあ。

「会長とか副会長とか、偉い人たちは結構真面目にそーゆーことやってる。芸祭で教室借りて、内装もちゃんとやって、コスプレ喫茶とかもやるしね」

「うわめっちゃ楽しそう！　みずきさんはどんな格好したんすか？」

「看護婦」看護士だ看護士だと無闇に喚く方が、あたしは差別だと思う。

「おおおー！」マーシー君が、きっとあたしで想像している。存分に、しなさいな。

「うん、まあとにかく芸祭は楽しい。でも偉い人たち以外が紅茶に関わるのはその時くらいなのね。後は部室で64の大乱闘やって懐かしんだり、旅行いったり、普通にご飯食べにいったりなんて、ゆるーい感じだから、午後の紅茶とかしか飲んでなくても全然だいじょうぶ。芸祭の秋までにティーバッグで入れられるようになってればいいから。興味ある人は、煮出し式とか特殊なやり方も教われて、ロイヤルミルクティーとかも作れるようになるけどね？」マニュアル通りに説明しながら、あたしは冷静に、他のテーブルの動き、盛り上がり方などを、観察する。可愛い娘は大勢の男子たちに任せるとして、かっこいい子は、あたしが是非入会させたい。

「……なんか偉そうにあたし説明してるけど、まああたしは偉くないから、ティーバッグでしか入れられないんだよね」おどけながら、観察し終わった。うーん、どうやら今年は不作みたい。

いかにも大学に上がりましたからーって感じで金髪にしてはみたものの、眉毛が太いままだから逆にダサく映る奴。多分一回も彼女なんかできたことないんだろうけど、チャライ風を装って高校の時からよく女の子と酒飲んでましたよーなんて誰も聞いてないのにひけらかしながら、ジントニック程度

で顔を真っ赤にして簡単に酔っ払ってる奴。そんなのばっか。キョーコさんがまとめて相手している男女なんかも、抜きん出ているマーシー君の側を離れてまで、絡むほどの美男子はいなそうだ。マーシー君のような環境が変わったからって気負わずに、下手に出るタイプのイケメンが、最終的に一番強いのです。

続きは本誌で！